

## 龜茲・于闐の研究

印度歐羅巴語に屬するトカラ語、東イラン語などいふ死語が、東トルキスタンから發見せられて學界を驚かしたとは、既に十數年の昔になつたが、此等の言語が何れの地に行はれ、また何れの時代に用いられたものであるか、尙また此等の言語はこれが行はれた時代及び地方に於ける日用語であつたか、それとも一種の政治語とでもいふべきもの、假令ばその地の征服者の間に於ける通用語で、土語は別に存したものではなかつたかといふやうな問題は、比較的永く論定されなかつたのであるが、一九一三年にコレージュ・ド・フランスの教授 Sylvain Lévi 氏が先づB種のトカラ語について此等の問題を論じ、ついで翌一九一四年には諾威クリスチャニヤの大學教授 Sten Konow 氏が東イラン語について同様の研究を公けにした。此の兩個の研究は一は今の庫車の附近から發見された文書を資料とし、二は和闐附近から出た文書を資料としたものであるが、その研究の仕方は殆んど全く同一であつて、文書中に見ゆる國王の名を支那の記録に求めて文書作成の時代を明らかにし、文書の用語がそれ／＼龜茲・于闐の國語であつたとを論じ、且此等の言語は西紀一世紀前後から唐代迄引き續いて兩國の日用語であつたとを論定したものである。言語は民族の標幟ではないにしても、此等の研究の結果を他の史上の事實と斟酌して少くとも龜茲・于闐の住民が唐代迄アーリヤ人種であつたとを否定するとは出來ない。東方佛教の上に此等の兩國が占むる重